

Title	岡倉古志郎 蠟山芳郎編著 新植民地主義
Sub Title	
Author	矢内原, 勝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.11 (1964. 11) ,p.937(81)-
JaLC DOI	10.14991/001.19641101-0081
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19641101-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る挙に出た時、かかる事情を背後に持った。いわば強い大衆的反発である。ブルジョワがフェルムの貸貸者として勢力を充実しようとする過程でかかる動きは無視できない。こうしたなかでブルジョワはフェルミエとの連帯を盛上げ、対処した。ブルジョワとフェルミエは同体である。そしてこうした連帯感はいよいよ強化されていった。しかしそのこと自体反ブルジョワ勢力の急速な抬頭を物語るものにはかならない。ブルジョワが村で勢力を持った時、彼は早々に彼に反発する側からの強い攻撃を受けたのであった。ブルジョワの苦悩は増した。

【終りに】フェルミエはブルジョワの出先として村に君臨した。彼はブルジョワの意を体し、村で兼業をよぎなくされた層に支配者として対す。彼は支配し同時に支配される存在であった。しかしそれが実際どれほどの意味を持ったであろうか。はなはだ疑問である。ブルジョワに対しフェルミエは約束した貨幣の一定額を支払うべく苦慮しなければならぬ。調達できないことしばしばである。このため彼は頼るべき唯一の役畜も手放した。彼は土地を売却、これを元手に役畜を購入、フェルミエとして徹底を策した。しかし今やそれが大きな見込み違いとなった。彼はフェルミエ転進でかえって苦痛を増した。自分で選んだ途であるが、結果は惨憺たるものであった。しばしば彼は物貫いに転落していった。もちろん同族間の結束をかためることで彼は自衛手段を講じた。事実ブルジョワに対する支払に窮した時、相互扶助が約束されている。しかしそれも所詮は水の泡であった。フェルミエはいわば農村のブルジョワとして

尊敬を受けた。しかしそれは単に高い地位に対するものにすぎない。経済的実態はといえは非常に不安定であった。しばしばそれを深化すべく謀略がめぐらされた。彼の地位は高い。にもかかわらずそれはブルジョワに依存していた。とにかく他に對し全面的に依存しての生活である。一般にそれがいかなる結果を招くか。フェルミエの動静はよくこの間の事情を物語るものといわなければならぬ。ラブルールからフェルミエへ、そして破局。こうしたなかでブルジョワのフェルム経略は思うにまかせない。小論でベナル氏はそう断ずるのである。原題は Marc Vénard, «Une classe rurale puissante au XVII^e siècle. les laboureurs au Sud de Paris», Annales (E.S.C.), n. 4-1955 に所収。私は当面「フランス地主制の研究」と取組んでいる。本稿はその第一部中、最終章執筆のため利用した素材の一部をまとめたものである。続稿を本誌次号以下に予定している。第一部では先進地域における地主制を扱う。

るものであるといつてもよいであろう。それでは新植民地主義は何かというと、これも植民地主義には相違ないが、第二次大戦後、とりわけ一九五七年以後、一方で社会主義世界体制の力量と国際的影響力が急激に成長し、他方で民族解放運動の急襲による植民地制度の崩壊がいちじるしく進み、資本主義世界における階級闘争が激化し、資本主義体制の衰退と腐朽がいつそうはげしくなった、いわゆる資本主義の全般的危機の第三段階における植民地主義の現象形態である。

新刊紹介

岡倉古志郎 編著
蠟山芳郎 編著

『新植民地主義』

本書はアジア・アフリカ研究所の共同研究の成果である。I 総論 新植民地主義の本質 は比較的新しい用語であり、定義も明確でない。「新植民地主義」の理論である。植民地があるところには植民地主義も存在するから、そういう意味ではローマの植民地主義などというものを考えてもよいわけだが、問題にする植民地主義は帝国主義時代の植民地主義であり、これを現代植民地主義または旧植民地主義と呼んでいる。現代植民地主義とは、一個のオーガニズムとしての、帝国主義の植民地・半植民地・従属国にたいする支配と収奪の全体系のことであり、また、それに関連した帝国主義諸国間、独占資本相互間の関係の総体である。したがってこれは相対包摂的な概念であり、帝国主義の植民地に関する

新植民地主義も旧植民地主義とその本質は変わらないが、歴史的條件は変化し、植民地はほとんど独立してしまつたので、現象形態は変化せざるをえない。つまり政治的に譲歩しても経済的にはいぜんとして支配をつづけるためにはどういふ形態をとるかということである。もう一つの新植民地主義の特徴は、その支柱がアメリカ帝国主義である、ということである。

II 各論 ではアジアからは、インドと沖縄、マレーシア連邦、中近東からは一般情勢のほかにはイスラエルと石油の問題、アフリカからは一般情勢のほかにはコンゴ、最後にラテ

ン・アメリカをとりあげ、新植民地主義の実証的分析を試みている。新植民地主義の性格上、実質的な支配・従属の關係は表面を蔽われているので、その抽出はなかなかむずかしい。各論はやや駆け足視察的傾向があり、汽車の窓から移り変わる風景を眺めているような感じである。時には汽車からおりてゆつくり歩いてみたい人にとっては、不満な点もあるが、巻末の資料と文献を含めて、執筆者の真面目な努力は認めなくてはなるまい。(岩波書店・A5・二七七頁・五五〇円)

矢内原 勝一

Z・K・ブジェンスキー著
山口 房 雄 訳
『ソビエト・ブロック』

共産主義というとき、私たちはまずソ連を考へるが、同じ共産主義国でも、多くの差異があつて、今や、一口に共産主義国とはいへなくなつた。そのような現在の多様性も実は何度かくり返した統一と分裂との結果であつたことはいうまでもない。著者はこの経過を